

あぶら通信

第17号 1995年12月20日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町宇津江 TEL 0577-72-4219



WD 1995.11

TOSHIHIKO TSUJI

岐阜県農業指導員 辻 利彦 氏作

飛驒だより

「R158号安房峠、冬期閉鎖」、こんな標示が道路の電光掲示板に出るようになりました。飛驒から信州松本へ抜ける道は、標高1790mの国道としては最高地点の安房峠を通ります。冬になれば信州は、近くて最も遠い隣県になってしまいます。冬が足早にやってきた飛驒です。

あぶらむ通信をお手にされている皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。またまた枕詞となってしまう恐縮していますが、皆様へのながのご無沙汰をお赦し下さいませ。前号よりはや一年、季刊であるものが、いつしか「一年まとめて号」になってしまいました。これも一重に私の怠惰によるものです。皆様方のお赦しを乞うばかりです。「諸魂庵落成」に終始したこの一年間を、まとめて報告させていただきます。

黙想の家「諸魂庵」落成

6月26日、100名近いお客様をお迎えし、黙想の家「諸魂庵」の落成を祝った。建物の性質上、沖縄の愛楽園の皆さんにも出席していただきたかったのですが、その替わりにと、愛楽園で介護員として働いておられる宮城あや子さん、そして、沖縄の伝統舞踊をもってお祝いをと、わざわざ遠路かけつけて下さった稲領さん一家、「あぶらむの宿」同様、多くの人々の暖かな気持ちにつつまれて完成を祝えたことは、私たちにとって大きな大きな喜びでした。

一昨年暮、黙想の家にと隣村丹生川村の岡田家旧宅をいただくことを決め、わずかの準備期間の後、昨年三月より建設を開始しました。田畑跡の埋立て造成、宿同様、洞さんの無料奉仕による基礎工事、そして、柳組の皆さんによる旧家の解体移築、棟上げまでは職人さんたちにお願ひし、その後は大工の片町さんと二人で、約一年かけてコツコツとつくってきました。材料の手配やその加工、また、電気、水道、かべ等々の職人さんの手配や調整など、日々の仕事は山ほどありました。この一年半は、諸魂庵建設と共にあったといっても過言ではありませんでした。それは、職人さんに全てをわたすだけの資金がなかったということもさることながら、私にあぶらむの理念を



諸魂庵に映える琉舞祝の舞「御前風」



諸魂庵落成の祝宴

与え、その実現のためにこの世を去った後もなお私たちを支え、導いてくれた多くの
人々の魂に、私たちなりに精一杯応えたいという思いがあったからにはほかなりません。
あぶらむの宿の落成式も感無量のものがありましたが、この度はまた別の意味で胸が
一杯になりました。「諸魂記念」として、これまで当会を支えて下さった方々で世界
されたお一人お一人のお名前を読みあげさせていただいた時、声がつまっていまい仕
方がありませんでした。

末筆になりましたが、新築なった諸魂庵に納められているタブレットと、そこに記
されている人々のお名前をご報告させていただきます。

諸魂記念

あぶらむの会、その理念と実現のため、多大なご支援、ご加禱をくださり、今はこ
の世の働きを終え、天にて憩う人々を記念し、その魂の平安を祈る。

青木恵哉 徳田祐弼 大城平永 上間源光 佐次田カメ 大兼久ウシ 玉城加那吉
平良栄輝 福地マツ 城間真喜 真栄城千代 仲間ナベ 吉田カオル 山城キク 新
垣ムタ 大郷興一郎 大郷キン 高島信孝 室田清作 室田紀子 木俣茂世 澤木敬
郎 久保田純子 中村紀代男 岡登五郎 青木恵美子 西川四郎 尾形典男 大平仙
次郎 竹内正信 大平フクエ 大野礼 大平真生 尾針明宏 吉田信 小林要 泰雅
人 小林丈子 ディック・ミネ 長浜和美 磯貝富雄 穴井充 荒木盛道 佃正昊
高橋清子 牛窪浩 真栄田光子 西平梅子

あぶらむの里農業事情

敷地内の建物づくり、土木、木工 農業（本年は田8反5畝、畑1反）、宿泊客の
お世話、講演、研修会、相談、長期滞在者の受け入れ、そして冬の一大仕事除雪、こ
こでの生活をざっと見わたしてもこれだけの仕事があります。あれもこれも欲張
りすぎ、「二兎追う者は……」ということになりかねないという意見も承知していま
す。しかし、あぶらむの経済をまわし、自然との調和ある生活を考えると、私たちは
無理を承知でもこれだけの仕事をこなして行かなければなりません。各々の部門を担
当してくれる人材があれば一番良いことなのですが…。

こんな私たちのおもいと現状に、大きな助け人がきて下さいました。加藤正さんで
す。加藤さんは岐阜県の農業指導員をなさっていて、地元古川町の出身です。「自分
たちの食べるものは可能な限り自分たちの手で」と、そのようなおもいはあっても農
業知識のまったくない私たちに、手を取り足を取って教えて下さいます。岐阜県内と
いっても端から端、3時間余をかけてあぶらむの畑まで指導にきて下さるのです。加

藤さんの開口一番、「土が良いのに野菜への愛情の注ぎ方が足りません。農業知識がなくても毎日畑に出て声をかけてやることぐらいはできるでしょう。植物も生きもの、愛情の大切さは同じです」。おっしゃる通りです。加藤さんの適切な指導と私たちの（私の？）心入替により、畑が生き々とし見事な作物ができあがりました。

あぶらむの農業担当部長加藤正さんの手記をお伝えします。

「あぶらむの里」はたけの四季

1995年8月上旬 昨年に続いての暑い夏。

宇津江の土はすばらしい土だ。有機質に富んでいて養分を抱きかかえる力が大きい。つまり、ふところが深いわけだ。これなら少しわがままな人間が野菜を作ってもそのわがままを聞いてくれてすぐには怒らないだろう。植物を優しく包み込み、根張りや茎葉を素直に育ててくれる土にちがいない。感謝である。

各養分のバランスもよい。植物を大きく育ててくれるチッソや、体をがっしり作るリンサン、花や果実に大切なカリ、微量でもとっても大切なテツやホウソウなど申し分なく入っている。耕してみる。ふかふかだ。耕うん機の後には、ほれほれするくらい素直に土がこなれてる。土のにおいが沸き立つ。何ともいえない香りだ。「私は、今、野良にいる。」実感が胸に迫る。

盛夏の下。有り余る陽をうけながら輝いていた雑草の「やつまた」や「かやつり」はロータリーの刃先で微塵にくだかれていく。雑草には申し訳ないがこのはたけには、やっぱり野菜が似合うと思う。

備中鍬で畦を作る。汗が起こされた土にぼたぼた落ちるが途端に土中に浸みいる。土が柔らかいわけだ。起こされた後から、ミミズやコガネムシの幼虫がクネクネと動くが、家の鶏「奥美濃古地鶏」によってまたたくまにエサにされてしまう。

ミミズの多さに鶏も途中で見向きもしなくなったのには驚いたが、それほど土の中には生き物が豊富であり、人間が耕さなくても自然界では常にミミズや他の微生物によって耕されていたのだ。本当に感謝である。

この土づくり、先人の努力に他ならないだろうと思う。土の改良は1年や2年で解決するものではない。日本の水田だって2000年の歴史の中で先輩達の努力で米が余るまで収穫できるようになったのだ。

柔らかく、深く、植物をいとおしむような黒い土。先人の努力に感謝しながら、今、土づくりを継続しなければならないと思う。

畦づくりが完成。

畑はみるみる姿を変えた。体の疲れとは裏腹に心は満足いっぱい。幸福感いっぱい

であった。この土から生まれる野菜はきつと柔らかく滋養に富んだものだろう。

まもなく、大根やはくさいのたねを蒔く時がくる。

たねまきについて

たねは最初に芽がでるのか根がでるのかどちらだろう。発芽と言うくらいだから芽のほうが先だろうとおもわれるが、残念ながら根のほうが先である。植物は動物と違いたねがまかれた場所で養分を吸い生きるのだ。つまり、動物のように移動することができないから、その場所で生活することを考えるわけだ。それは、まず養分を吸う体制から始まる。

蒔かれたたねは、いつでも根と芽が伸びるわけではない。伸びた途端に寒さや暑い日がきたらたちまち枯れるからだ。だからたねは伸びる時を心得ている。たねを蒔くと人はいうが、まさに蒔く時がある。それは植物の持つ生命に耳を傾けて聞いてきた結果に他ならない。



9月の長雨で田がかわかず刈取りに悪戦苦闘の今年でした

あぶらむ研修会

徐々にではあれ、あぶらむではいろいろな研修会が持ち込まれ、また催すことができるようになってきました。YMCA やガールスカウト、また教会キャンプなど、研修所としての機能をもつ諸魂庵ができてからは、一段と内容も充実してきました。

高山日赤病院の中堅看護婦の研修をお引受けして3年目、今年は新築なった諸魂庵を用いて、日ごろおもっていることを自分なりに表現してみました。わずか1泊2日の研修でしたが、確かな手ごたえを得て嬉しく思っています。

また、正月には昨年続き、地元の人19名と共に、ネパールの山歩きを楽しみました。エベレストをはるかに見上げる標高3800mのシャンボチエまでの4泊5日のきつい山歩きでしたが、厳しい自然条件の中、物質的には決して豊かとはいえない彼等の生活ですが、その厳しさの中で育まれた心のやさしさに触れた時、「真の豊かさとは何か」を参加者一人々が考えさせられたように思います。

また、この研修旅行を通して、地元の青年大久保嘉久君が海外青年協力隊に参加し、本人の希望したネパールでこの7月より働いています。彼のような青年がうまれたこと、私たちの大きな喜びであり、感謝です。次号には彼のネパール報告をお届けしたく思います。ご期待下さい。

最後に、本年の高山日赤病院中堅看護婦研修会の参加者からいただいたお便りをご紹介させていただき、研修会の一端をお届けいたします。

先日は、リフレッシュ研修に参加させて頂き、どうもありがとうございました。

研修目標で第一に達成できたことは、“心身共にリフレッシュし、職員間の親睦を図る”ということでした。日常の多忙な業務、家事・育児など、すべてのことから全く解放され、上げ膳、すえ膳のお美味しいお食事の上、豊かな自然に身を任せながら、仲間と共に学び、自分をみつめリラックスできた機会が与えられたこと、本当に良かったと感謝しています。

あらためて、二日間の研修をどうもありがとうございました。

素晴らしい環境の中で、“触れる”という大きなかつ大切なテーマを中心に幾つかの体験をさせて頂きました。最後の実習では、コミュニケーションの最大の武器ともいえる言葉を制限することにより、残された器官を最大限に用い、どうしたら相手に自分の気持ちを伝えられるかを一生懸命に考えつつ、40分の間、徘徊しました。

“コミュニケーションは、小手先の技術ではなく、アートである” “テクニックではなく、もっと全体的、総合的なもの”と言われることがほんの少しでもわかったような気がします。4つある心の窓の内、①をもっともっと広げること、開かれた心が大切だと教えて頂きましたが、まず第一歩は自分からすすんで声かけすること、相手のはなしに耳を傾け、しっかり聞くこと、共感し、うなづくこと、自分の心を開いて考えを伝えること、そうすれば相手の心にもきっとふれることができるのではないのでしょうか。相手を信じ、時にはゆだねることも大切ですね。また、人と人との出会いや、かかわり合いの中で目に見えることだけにとらわれるのではなく、そこに隠されたものに目を止めるべきことも気付かされました。逆に言えば、外見よりも中身を見る目を養うということでしょうか。私達は幸い目が見えて感謝なことなのですが、それによって却ってかくされた部分があるのではないか、人は見える、わかるといっていながら、何一つ見えない、分からないのではないか…ということを感じました。私達は常日頃、何をみているのだろうか、私は今、何を一番大切にしたいと思っているのか、どこに価値をおくのか—ということまで考えさせられました。

また、私はよく、中二の娘と衝突するのですが、先日もあることで口論になり、とにかく娘を前にして言いたい放題の自分も大人げなくと思いますが、その後子供が、“お母さんは、それで悪いとは思っていないの？”と強く言われ、グサッときました。とにかく、その夜は情けないやら、口惜しいやら、何とも言えない複雑な気持ちで泣けて仕方ありませんでしたが、翌朝、意を決して“昨日はお母さんも悪かったわ、ごめんね”と謝まり、やさしく手を触れると子供も照れ臭そうに小さな声ながらも“私

もごめんね”と答え、爽やかな気持ちで出かけることができました。本当に自分の態度ひとつで変わるものです。うなづきと傾聴も大事だと思いました。納得のゆく迄、話させることですね。たった3つの実習から、どんなことでも学びの材料にできるんだなあって改めて感心しました。

ところで先生は40歳で今までの夢を実現させる為、ヒダの土地においでになり現在の生活があるのですね、先生のその考えについてこられた奥様も又、共通の価値観がおりなのでしょうね。大都会の便利な生活を捨て、こちらに永住される決意はなみなみならぬものがあつたことでしょう。ご一緒になられた頃から同じ目的に向かい進んでこられた結果だと思ひます。最高に素晴らしいご夫婦のあり方ですね。家に戻ったら、主人はテレビの前でゴロ…（いつもですけど）比べるすべもありませんが、内心マァ気楽でいいか、…

都会からここを訪れる旅人は、どんなにか心安らぎ、渇きの心がみたされ、うるおい、求めているものが得られるのではないかと思ひます。

山を下りて、いつもの生活に戻ると、あの2日間の体験がまるで夢の中での出来ごとのように思えます。

あぶらむの里での研修が、これからの私にとってきっと良い指標となり、忘れ得ぬ思い出として残ることでしょう。家庭において、職場や地域において、学んだり、教わつたことを生かし、実践させて頂きたい。研修に行く前に比べ、何かやさしい気持ちが与えられたような気がします。

最後となりましたが

本当にどうもありがとうございました。先生との出会いを感謝します。きっと、これからも折につけ、あの時学んだ言葉や、先生のことばがポロポロとこぼれてくるかも知れません。ふと立ちどまって、今自分はどこにいるのか…と、自分に問うてみるのも必要かも知れません。

'96 あぶらむネパール研修旅行

- Aコース（大人を対象としたもの）名古屋空港発

期 間 '96年1月4日～15日（12日間）

費 用 268,000円

- Bコース（子供から大人まで）関西空港発

期 間 '96年3月24日～4月3日 11日間

費 用 213,000円

旅行場所は両コースともチトワン国立公園及びアンナプルナ周辺のトレッキング（山歩き）

詳しくはあぶらむの会までお問合せ下さい。

さくら道国際ネイチャーラン

そして、**広島—長崎国際平和ウルトラマラソン**

「この地球の上に、天の川のような美しい花の星座をつくりたい。花を見る心が一つになって、人々が仲よくらせるように」、かつて日本最長の路線バスが名古屋—金沢間を走っていた。そのバスの車掌をしていた・故佐藤良二さんは、太平洋と日本海を結ぶ266kmの道を桜のトンネルで結ぼうと決意した。彼は少ない休暇を使い、乏しい蓄えを注ぎ、2000本近い木をその沿道に植えた。しかし、志半ばで病に倒れ、逝った。47歳の短い生涯だった。

「限りない夢を託したさくら道」、佐藤良二さんの遺志を受け継ぐとともに、彼が夢みだ“さくらのトンネル”を走り抜け、自然との調和、世界の平和実現を求め、佐藤さんの出身地、岐阜県白鳥町が中心となって、昨年より「さくら道国際ネイチャーラン」が開催された。そしてこれまで、いくつかのウルトラマラソンを企画してきた当会が、全面的に協力することとなった。

その大会に、当会の会員でもある高澤芳子さんが招待選手として参加、250kmを見事、35時間44分で完走された。乳ガンとの闘いを、以前あぶらむ通信に転載させてもらった彼女ですが、彼女のこれまでの歩みの一端を知る者として、彼女の完走は我がことのように嬉しかった。

ここに、「スポーツとよかわ」の、「それでも私は走り続ける」を転載させていただき、彼女の人生とさくら道の奮戦をお伝えいたします。

「幸せな生活が一転“地獄”に」

「気が付いたら、走っていたんです。後ろを振り返るのが怖かった。でも、過去があるから今があるんですね」

名古屋市南区出身。活発でよく笑い、バスケット、陸上競技とスポーツも万能。どこにでもいる“普通の女の子”が普通に恋をして、ハタチで結婚。東京に居を構えて二男をもうけ、何不自由ない生活を送っていた。が、三年後に離婚。これが彼女にとって『地獄の日々』のプロローグでもあった。

夫は消息不明。「パパは」を繰り返す長男と、伝い歩きが出来るようになったばかりの次男を抱え、視界に入る全てが白くぼんやりかすんでいくのを感じた。「子供たちに罪はない。育てなきゃ、生きていかなきゃ」。

テレビのスイッチをひねるように、生活がガラリと変わった。新聞配達に始まって昼間は飲食店のパートに出掛け、夜は洋裁・着付けの免許を生かして細々と教室を開

くなど、骨身を削るほど働いた。それでも「毎日の生活がやっと。子供に何一つ欲しい物を買ってやれなかった」という。

身内を頼って東京から愛知県西尾市へ。二人の子供も大きくなり、身の回りのことはもちろん、小さな手で母親の手伝いも買って出てくれる。「“貧しいながらも楽しいわが家”っていうのかな。何となく遠くの方から光が差し込んできたんです」。

もう大丈夫、やっていける。時間をかけて、やっとの思いで手に入れた幸せ行きの片道切符。だが、ホームで芳子さん親子を待ち伏せしていたのは、天使ではなく『ガン』という悪魔だった。

左胸に異常を感じ出した。三十歳の時。乳房の一部が茶黄色に変色し、日を追って大きくなる。「乳ガンだ。間違いない」。医師の診察を受ける前に彼女自身、分かっていた。が、医者には診せたくない。会って病名を知るのが怖い。それもある。しかし本当に怖かったのは「手術—入院—通院」となって生活を守れなくなることだ。息子は小学校の五年と三年。「命を惜しいとは思わない。私は子供のためだけに生きています。先生、手術をしなかったらあと何年の命なの」。三年はもたないだろう—その言葉に、断腸の思いで胸にメスを入れることを決意した。

「あの時、先生が『五年は生きられる』と言っていたら、私は手術を選ばなかったでしょう。下の子が義務教育さえ修了してくれれば、この世に未練はなかったんです」。

手術は無事終わった。が、再発の危険性もある。「神様お願い。あと五年は生きさせて」。死を覚悟し、術後も子供を支えに働き続けた。「胸を取った時点で、もう“オンナ”は卒業。生きている間に子供に何を残してやれるか、そればかり考えていました」。

しかし再発の兆しはなく、昭和五十一年の夏「一人でできる前向きなことを」と何気なく始めたジョギング。それが彼女の夢となり、人生をも変えていった。

一人黙々と練習を積み、三十七歳で伊吹山10キロマラソン初挑戦。「場所も申し込み方法も知らなかったんですが、大勢で走るのがあんなに楽しいなんて。『私は一人じゃないんだ』と改めて感動しました」。以来、月一回のペースで県内外の大会に参戦。距離も走るたびに「欲が出て」10キロから20キロ、30キロからフルと徐々に伸ばし、四十歳の時には北海道の「サロマ湖100キロウルトラマラソン」に挑んだ。100キロ以上のウルトラ出場は二十回を超え、年末年始は東京—京都500キロを六日間で走り抜く「東海道53次ジャーニーラン」が待っている。そして今春、名古屋—金沢250キロを不眠不休で走る過酷なレース「さくら道ネイチャーラン」に参戦し、二日がかかりで見事走破。前年リタイヤの雪辱を果たした。

「走っているとたまに傷口が痛むときがあるんですよ。そんな時は言うんです。『そう怒りなさんな。長く付き合っていく友達じゃない』って」。

自らを“雑草レディ”と称し、鉄人レース・トライアスロンにも果敢に挑む。

昨年十二月、マラソン仲間だった自衛隊員の正義さんと再婚。一緒にスイミングに通い、各地の大会に出場するなど、文字通り二人三脚のマラソン人生を歩む。「ちょっと遅れちゃったけど、青春を今、思い切り楽しんでいます」。家庭不和、人間不信、そしてガンとの闘い。その全てを人生の肥やしに、長いロードを一步づつ力強く走り続ける。

「オッパイ一つ取ったら笑顔と幸せが戻ってきた。人生って不思議ですよ」と満面の笑みをつかった――。

今年はまだ、戦後50年ということで、かつての戦争におもいを寄せ、不戦平和を求めて各地で様々な催しがなされた。核兵器の廃絶と世界平和を願って、88年89年に催された「広島―長崎国際平和ウルトラマラソン」が、その記念の年にあわせて第3回大会を開催した。核兵器の廃絶と世界平和を訴え求めて、8月6日正午広島を出発し、9日24時まで長崎ゴール、その間429 kmを一人のランナーが走り続けるのである。そんな大会に今年は、海外から3ヶ国4人、国内から4名、計7名のランナーが参加して行われた。



海外ランナー達の参加動機をご紹介します、ランナー達の平和へのおもいをお伝えします。

RUN FOR PEACE

8月6日広島原爆ドーム前をスタート

ランナーからのメッセージ

Max COURTILLON マックス コーティロン 68歳 男性 フランス人

私がこの大会に参加したいのは、この大会の目的が、単なるスポーツに終るのではなく、本当の意味での平和や民族間の理解、そして、原爆の追放にまで広がっていくからです。それゆえに、私はフランス政府が検討している核実験の再開には断固反対しています。

Horst PREISLER ホースト プライスラー 60歳 男性 ドイツ人

私は、人生を何の考えもなしに、そして、目的なしに過ごしたくない。むしろ、私たちの生きるこの時代の直面する問題に対して立ち向かっていきたい、と考えています。

全ての人に対して、私は地球上のあらゆる暴力に立ち向かう意思表示をしたいと思っています。そして、これは平和の意思表示でなくてはなりません。

私は、世界の人々に広島・長崎の払った犠牲について思い出してもらいたい。そして、そこで死んでいった人々、今だに後遺症で苦しんでいる人々に対しての個人的な悲しみを表明していきたいのです。

私は、私たちの周りの人々をその無関心な状態から呼び覚ましたいのです。私は、この大会を異なった国のランナーたちと行いたいと思っています。また、そうすることによって、私は自国の特別な責任についても明らかにしていきたいと考えています。

原爆の犠牲者に対して私にできる唯一のことは、二度と同じ悲劇を繰り返さないということだけです。

ランナーは、平和に向けての営みを共有する中で、他の人々へ人種や主義、肌の色を乗り越えた友情をみせることができるでしょう。

そして、それは、伴走者間の協力が、また、ランナーと伴走の協力のみが、成功への唯一の道であることを証明してくれるでしょう。

Martina HAUSMANN マルティナ ハウスマン 35歳 女性 ドイツ人

私は平和のために何かしたいと願っています。私の故郷は第二次世界大戦で95パーセントが破壊されました。また、私は複数日にまたがるレースの経験をもつウルトラランナーです。だから、広島から長崎までをその2つの特別な日に走ることは、世界平和に向けてのまさに私なりの表現方法なのです。

残念なことに、私の友人のW. REISERTは、数年前の大会では完走することができませんでした。

だから、私は、彼女の努力をも継続したいと思っています。私の心と体が、走りきるのに充分でありますよう、私は現在沢山のトレーニングをしています。特に、この広島—長崎の平和ウルトラマラソンのために。

Patrick MACKE パトリック マック 40歳 男性 ドイツ在住イギリス人

私は一人のランナーとして、自分が世界の平和のためにできる最も意味あることは、広島から長崎までを走ることだと信じています。

なぜならば、この大会、そして、それによって生まれる状況は、人々を様々な形で結び付けていくからです。そのことを本当にわかるためには、この大会に参加し、直接それを体験する以外には方法はありません。

私は、再びそれを体験したい。

〈編集後記〉

11月初旬、落葉の終わっていないところに季節外れの雪となったため、葉の上に積もった重い雪のため木々がへし折れ、大きな被害が出てしまいました。葉の抵抗だけで太い幹や枝がへし折れるのです。全てには「時」と「備え」というものがあることに、改めて気づかされました。

「一年まとめて号」となってしまったため、皆様にはご迷惑をかけてしまいました。来年からは、「あぶらむミニ通信」を発行し、新鮮な出来事をお伝えしたく計画しています。

また、恐縮ですが、会員の方には会計年度末ということで、会費納入のご案内を同封させていただきます。宜しくご協力のほどお願い申し上げます。

日一日寒さに向かいます。どうぞ呉々もご自愛下さいますようお願いいたします。

寄付者一覧(11月13日現在) 谷 信治 阿久津富男 政二清蔵・澄子 北村征男
聖パウロ教会 吉田茂晃・優子 大八木米子 牛込聖バルナバ教会 森田トミ 湯田啓一
中沢 隆 浦真太郎 松戸聖パウロ教会 下田 昇 山田益男 百井幸子 桑名エビファ
ニー教会 半田節夫・純江 宮崎誠也 嘉数弘子 東京聖テモテ奉仕会 小笠原スワ 浦
池龍之助 加倉井佳子 菊池栄三 高野アサノ 室田 進 愛楽園木曜会 小野 翠 渡
辺多茂夫 永井道子 萩原久子 久保田彰 田島義信 古川道泰 又吉フミ 山崎俊樹
上原英一・芳子 藤沼義治 又吉亀次 原川恭一 熊谷一綱 深野 毅 徳田その 松丸
一夫 掛川尚子 野村 桂 松岡和夫 坂本吉弘 福田詩郎 広瀬勝也 豊里正子 風戸
邦彦・修子 北村晴光 篠塚 達 新垣タケ子 菊澤満喜子 西垣正子 岡田裕子 塩川
寛昇 林 英夫 越田 信 小宮山眞市 大城ツル 筒井啓子 佐々木亜子 増山文子
入川ヨシ 外村民彦 味岡敏江 鈴木康邦 泉 朝仁 松崎 仁 長間四郎 逸見 操
系数宝善・敦子 穴井悦子 磯貝澄美子 佐藤泰子 永井道子 西村元宏・睦子 野崎久
子 川西重治・千枝子 木下春子 杉浦教二郎 西平 直・則子 菊池武弘 松本信代
吉田 立 杉山千鶴子 佐々木国夫・紀久江 玉城豊吉 森本晴生 吉植よし子 清水靖
夫 石原つや子 高橋 保 宗像和雄・千代子 池田秀直 畑井正春 田中誠 祈りの家
教会 小柳 澄 真栄田義全 白神 雄 安斎勇夫 河野正司・マリ子 桃原松五郎 相
沢牧人 大房健樹 高野 勇 江州良秀 形部 賢 村瀬真理子 村岡 明 大久保茂之
鈴木育三 池田世起子 瀬堀光江 渡辺 隆 東 璋子 神田キリスト教会 小沼英子
鶴川雅之 須藤真起子 洞 邦宏 小笠原忍 熊崎 厚 古屋良子 谷 昌二 根岸秀行・
亜麗朱 黒木一郎・誠子 島谷晴朗 甲藤善彦・光江 直井雅子 瀬川信子 泊 哲次
野村 晃 菅原辰男 井原洋子 一丸直也 川上廣之 屋良朝夫 浅川英明・尚子 島田
信弥 稲嶺たつ子・亜矢子 山下佳子 午丸忠男 金沢泰三 佐藤六郎 古沢昭夫 杉村
進 高橋清子 阿部潮音 石崎東人 財満研三郎・由美子 志村弘子 中屋源兵衛 川口
弘二 松岡秀子 畑 洋一 岸井孝司・ミツ子 刑部勝弘 梶原恵理子 岡野 峻 戸口
純 山本桃栄 岡登正子 小林賢一・佳子 上埜一樹 猪野愈・三智子 内間安仁 折茂
謙一 前田康雄・彰子 内藤由美子 平野幸男 長谷工業 荒川紀子 今井裕子 小沢福
夫 大門宗裕 岩下ひさ 太田精一 吉本 正 下形設備 大脇一生 村田明美 大杉匡
弘 岩間光雄・芳子 長田英子 宮田洋子 武田 宏 清水幸平 忍 昭弘 長山治之
小仲 宏 坂井瑩子 岡田初子 中村 清 松村行雄 本西友成 沢田京子 川合好子
神島洋二 荒木美鈴 染谷孝章 桜井 恵 小泉恵子 「母と子を守る会」 中村正実 小
野健一 工藤真喜子 小野 裕 保坂正三 三原一男 清水聖ヤコブ教会 尾針恵子 小
林美喜 田尾兵二 楠木 静 高島光江・富美江 松雄 索 高瀬 章 京都復活教会
秋永厚子 高橋敦子 長坂 尚 熊谷聖公会 荒木 譲 平野 操 成田麻子 大八木
規夫 田島昌子 鬼本照男 寺本義男 山城ハル 田島信次 石森牧・真子 炭竈英子 (株)
ショーテック・ホームサプライ 三浦一男 朝比奈誼 上野良一 宮城タケ 伊藤浩子
高澤芳子 岸元忠義 新城甚栄 新田忠雄 浅野純子 川崎東介 大城松助 永井千枝子
隈崎加代子 渋沢一郎 谷 市三 西田邦昭・賀瑞実 順不同